
あの頃

パントマイム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの頃

【Nコード】

N8676K

【作者名】

パントマイム

【あらすじ】

映画の後、千とハクが再会した時の話。

（前書き）

今更ながらセンチです
・

私はどこにでもいる女子高生で。

きつと皆は平凡な女の子だと思っっているだろう。

ただ恋愛が不器用なだけの

頻繁に交わされる他人の恋愛話を聞きながら、羨ましく思う。

これはどこが焦りという感情に似ているかもしれない。

今まで悩みであろう話をしていた嘉穂が、私のほうを向いた。

「ねえ、千尋。」

同意を問う言葉でなく質問の意。

なに。と答えながら不審に思った。

いつもなら不機嫌そうな顔で話が続きそうなのに。

「あんた男に興味ないでしょ」

「なんでそんな話になるのよ」

「え？女の勘？？」

「…」

「だって、千尋ってば彼氏出来てもすぐ分かれるし、この前なんか1週間だっけ？今なんか彼氏作り諦めてるみたいだし。何回か彼氏いたみたいだけどつまんなそうだし。そのくせ男友達はいるみたいだけ。」

「…そんなことは…」

「そんなことは？」

「あるけど」

「でしょ？いつになったら恋する千尋を見れるのかしら」

につこりと笑う嘉穂になんとなく気まずさを感じ、自分でもちよつと長すぎるかなと思っている栗色の髪をいじりながら視線を泳がせて窓の外をみた。こういう時は窓側の席で良かったと思う。

腰まである髪は無造作に流してあるため、少し開けてる窓からそよぐ風にとらわれている。

もうすぐ春が終わり夏がくる。日常とかした時間の流れがとても疎ましくてもどかしい。

高校生ともなると、周りは次々と彼氏ができてきて、彼氏がないほうが珍しくなった。

段々皆の彼氏の話が多くなり、千尋一人、話についていけなかった。

周りの子たちにはやされ、彼氏をつくろうとするがどこか違うのだ。

その理由を皆は分かってくれないだろう。自分でもわからないのだから。

毎日焦りやもどかしさといったもやもやとした感情が、塵のように積もり時々息ができなくなる。

早く、早く…

嘉穂と別れた後蒸し暑い中、明日から長い夏休みだということもあり家までいつもよりゆっくりと歩いて帰る。

千尋の家は少し遠く周りに住んでる人は大抵自転車通学だ。

しかし千尋は徒歩で通学していた。

千尋の住んでる地域は田舎であり、あたりに緑が多い。その中にひっそりと抜け道があったり、今は誰も来ない祠や変な形の石垣、寂れた建物がひっそりとたたづんでいたりする。

足下を流れる川は太陽の光を浴びてキラキラと輝いていた。

そんな景色を見るのが好き。いろんな発見があるのだ。

ほら、今も道端にひっそりと咲いている野花は淡い桃色の花弁を纏っていたり向日葵のように黄色く小さな花や快晴の空にも負けない青の花を咲かせている。

花束にしたら可愛いこぶりの花束になるだろう。

一度思うと作ってみたくなり、暫く悩んだあと「よし」と花が咲いているあたりに腰を降ろした。色のバランスを見ながら花を手折る。できた花束はやっぱり可愛いかった。

出来た花束を片手に帰り道を進む。途中の分かれ道をわざと家の帰り道と違う方を選んだ。

この先には人々の記憶から忘れさられ、いずれくちゆく建物や祠、そしてそれらを守るかのように道の真ん中にじんとつてる石像がある。石像は何かの神様だろうが千尋には猿にしかみえない。

元は鮮やかな赤色だっただろうが時間とともに風化し、所々剥げてくすんだ朱色に変化した建物の入口が見えてきた時、涼しい強い風が吹いた。

ザア―… い… っろ…

??

葉と木々がすれあう音とは別の声が聞こえたような…

足を止めキョロキョロと声がした方向を探す。もやもやした感情がいつそう強くなり心臓がバクバクと波打つ。

胸に手を置いて心臓を静めようとはするがそれは意味をなさなかった。

片手に持った花束がくしゃりと潰れる。

急にふくれあがった感情を抱えきれず泣きそうだ。

花束を強く握りしめ耐える。

「すまない。遅くなった。…………千尋、会いたかった」

背中から抱き締めらた瞬間、せきをきったかのように涙が溢れだす。

「…………ハク」

嗚咽を繰り返しながら言ったためあまり言葉にならなかった。

なんで忘れていたのだろ。

貴方を好きな気持ちはこんなにも溢れていたのに。

私の涙で濡れてしまったハクの腕をぎゅっとにぎり、離すまいと力をこめた。

「会えて…よかった」

「いずれ会おうと約束しただろう?」

ハクの優しい声が耳に届いた。

ハクの暖かい体温が幻ではないと教えてくれた。

ハクが私の頬に両手を添える。

せつかくの再会なのに、涙でぐしゃぐしゃになった顔を見られた。
再会する時は笑顔で会いたかった。

でも、いつ会おうと笑顔で再会することは不可能だっただろうけど。

「会いたかった」

微かに震えた声でハクが言った瞬間、私の唇に柔らかく、暖かいものが触れた。

初めてのキスは涙の味がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8676k/>

あの頃

2010年10月14日20時38分発行